開　会　の　辞

公益社団法人 日本証券アナリスト協会
会長 新　芝　宏　之 CMA

第34回「日本証券アナリスト大会」の開会に当たり主催者を代表しまして、ご挨拶申し上げます。本日は、ご多用のところ、多数のご来賓の皆様、会員の皆様にご出席いただき厚く御礼申し上げます。この「日本証券アナリスト大会」は、日本証券アナリスト協会の認定アナリストであるCMAの役割を広く社会に認識していただくとともに、CMAの自己研鑽と相互交流を目的として1986年以来30年以上にわたり毎年開催して参りました歴史ある大会です。

わが国では、来年の東京五輪に先駆けて、世界陸上やラグビーワールドカップが大きな盛り上がりを見せています。特にラグビーワールドカップでは、日本代表は開幕から３連勝、初のベスト８進出が目前に迫り、大きな期待を集めています。日本ラグビーが史上最強とも言われるこの強さはどこからくるのでしょうか。それは対照的な二人のヘッドコーチ（HC）によって培われた二つの異なる要素によるものだとも言われています。前大会で南アフリカを撃破するという奇跡を起こしたエディー・ジョーンズ前HCが徹底的な管理の下で「基礎力」を築き、その土台の上に今大会のジェイミー・ジョセフHCがいわば自在に考えるラグビー、「応用力」を取り入れました。基礎と応用の双方の充実によって初めて、国際的に勝てるラグビーに進化したのではないでしょうか。

翻って、わが国企業が国際競争に勝ち抜くためにも、二つの要素が必要であると考えています。それは「稼ぐ力（ROE)」と「社会的な存在意義（Purpose)」です。近年、わが国企業にもROEを重視した経営が定着しつつあります。しかしながら、短期的な利益を過度に追求す

©日本証券アナリスト協会　2019

る姿勢への批判も高まっており、ROEを追い求めるだけの経営は十分ではありません。企業には社会的な存在意義が不可欠だと思います。本年８月、米国主要企業の経営者団体である「ビジネス・ラウンドテーブル」が発表した声明の中にも、Purposeの概念が示されました。Purposeは、単なる「利益極大化の目的」を超えて、「企業理念」と意訳されることもあります。「株主至上主義」が見直され、全てのステークホルダーに長期的な価値を生み出す社会的な存在意義の重要性が再認識されつつあるように思います。近年、ESGへの注目度合いが急速に高まっているのもこうした背景によるものでしょう。環境、社会、ガバナンスを考慮したESGは、地球温暖化や貧困などの社会的課題の解決という大きなムーブメントであり、社会貢献の面から見るとかつてのCSRに近い概念です。CSRとの大きな違いは、企業のサステナブルな成長、つまり将来の企業利益に結び付けられている点だと考えます。世界持続的投資連合（GSIA）によると、ESG投資額は世界で30兆ドルを超え、今やESG投資とそれ以外を区別することが難しくなってきているとすら感じます。つまり、全ての企業が対話を通じてESGという観点を取り入れる必要があるのかもしれません。

わが国企業が東京五輪後もサステナブルな成長を実現するためには、確かに「稼ぐ力」を高めることも重要ですが、それだけでは足りないと思います。更なる成長にはプラスアルファが必要です。その解がPurposeやESGではないでしょうか。本日のパネルディスカッションでは、ROEとESGを組み合わせたROESGというキーワードについて議論いただけるので、私も楽しみにしています。

本年の大会においては、「東京五輪後の日本、サステナブルな成長を目指して」をテーマに掲げました。まず、記念講演をお二人の方にお願いしています。初めに、元五輪陸上選手で世界選手権メダリストである為末大氏に「ハードルを越える」という題目で、続いて日本航空代表取締役会長の植木義晴氏には「航空会社の社会的責任」という題目でご講演いただきます。続くパネルディスカッションでは、エーザイの専務執行役CFOである柳良平氏をモデレーターとして、MSCI INC.のマネージング・ディレクターである内誠一郎氏、いちごアセットマネジメントの代表取締役社長であるスコット・キャロン氏、コニカミノルタの代表執行役社長兼CEOである山名昌衛氏をパネリストに迎え、「五輪後の新時代に求められるROESGによる価値創造」につき、議論を展開していただく予定です。こうした講演や討議が会員の皆様に新たな視座を提供できれば幸いです。

さて、ここで当協会の取組みをご紹介させていただきます。当協会では2019年度を初年度とする３カ年中期経営計画を策定し、その重要項目の一つとして、新しいCMAプログラムを2021年度からスタートさせる計画です。CMAの役割は時代とともに大きく変化しており、提供する資格制度の内容もそれに合わせて変えていかなければならないと考えています。現在のCMAは27,600名超ですが、CMAの需要は多様な分野で高まっており、金融・証券業界にとどまらず、一般事業会社の財務部門やIR部門、更には社外取締役などでも多くの方々が活躍しておられます。そこで、CMAの定義も「証券分析業務に従事する者」から「金融や投資の決定プロセスに関与するプロフェッショナル」へ拡大、再定義し、CMAという資格の価値をより幅広くアピールしていきたいと考えています。デジタライゼーションも大きな課題であり、ウェブサイトのリニューアルなど、情報コンテンツ、情報提供の仕方などについても大幅に見直していきたいと考えています。CMAの皆様に対して、高い職業倫理観を把持していただくよう働きかけると同時に、金融・投資のプロフェッショナルとして、高度の専門性を維持、向上できるように市場、制度、技術などの変化に応じた最新の情報などを提供していくように努めます。また、金融資本市場の公正な価格形成や、日本経済の健全な発展に貢献するような対外的な働きかけや発信などについても引き続き積極的に行っていきたいと思います。

当協会は、会員をはじめ本日ご出席の皆様の一層のご協力、ご支援をいただくことにより、新しい社会的使命を一緒に果たしていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

本大会の運営、企画にご尽力いただいている成瀬委員長をはじめ、大会実行委員の方々に、この場をお借りいたしまして御礼申し上げます。

以上をもちまして、開会の挨拶とさせていただきます。

©日本証券アナリスト協会　2019